



「あなたは観音様の申し子だから」と、逸枝は何度母登代から聞かされたかわからなかった。それも道理、高群勝太郎夫妻にはその前に三人もの男の

子が生まれたがみな夭折し、一番長く生きた子は義人と名づけられていたが、これも数え年二歳でなくなっていた。嘆き悲しむ両親に、或人が筑後山門郡の清水観音への願かけをすすめた。その気になった母が願をかけたところ、明治二十七年正月十八日に逸枝が生まれた。一八日は観音様の縁日である。母はそのとき「此子を丈夫に成長させて下さいましたら、きつと二人でお礼参りをさせますから」と誓った。それかあらぬか逸枝は元気に育ち、そのあとに生ま

れた子もみな育つたので、高群家はすつかり熱心な観音信仰一家になった。逸枝も後々事あるごとに、観音様と自分とのつながりを思いおこしている。父勝太郎は小学校長であった。逸枝が生まれたときは豊川にいたが、その後下益城郡内の小学校を転々し、逸枝もそれについて農山村での生活を過した。父は妻の登代をすべての学校行事に伴い、新聞・雑誌も音読して聞かせ、その教養を高め学問の楽しみを教えたので、妻はやがて夫の代りに塾生に教



望郷子守唄の碑(松橋町寄田神社)

高群逸枝

◆鈴木喬著(歴史家)

える程の高い素養をもった。その妻は我が子逸枝を「かくや姫」とも呼び、幼い頃から昔話や物語りを語って聞かせたので、逸枝の幼い天分は早くも開花し、一二歳のときには父の大人の弟子に『十八史略』の素読を教えていたくらいである。

父の希望によって明治四二年、県立熊本師範学校女子部に入學したが、脚気で長欠した上に危険思想の持主ということで文芸部員四人とともに退学させられた。このときの父の失望と怒り

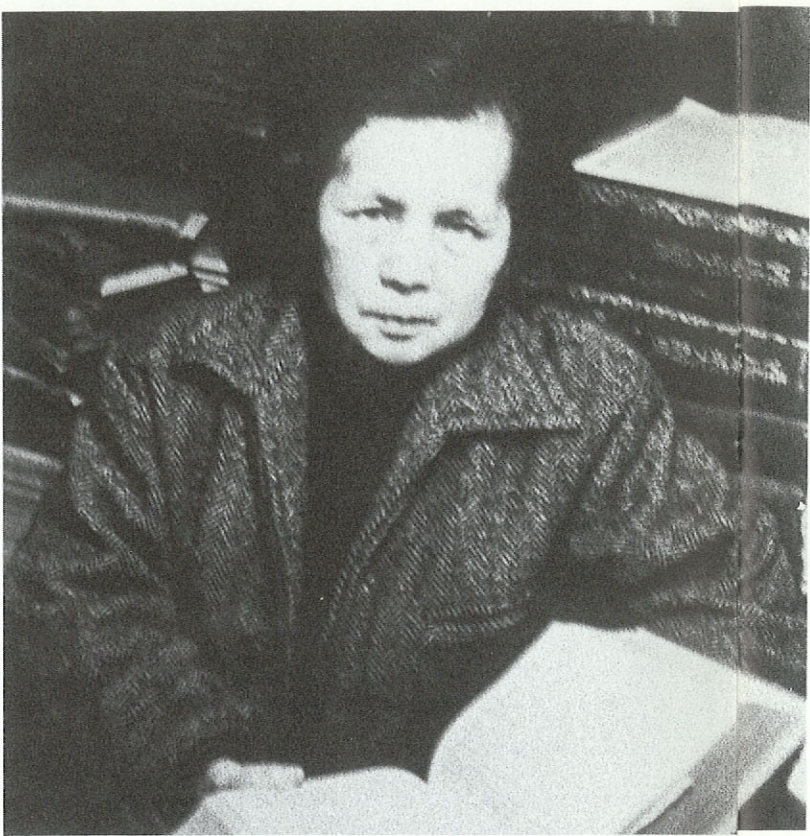
は並々のことではなく、以来逸枝は両親による「かくや姫」「観音の申し子」の地位を失ってしまった。しかし彼女の鋭敏な感受性は、人間の内面にかかえる不幸について異常な程に反応し、既に一二歳の頃自分が仏に仕えることで自分を救済しようと思いつめた程度であった。

師範退学後の彼女は独学で努力、大正二年熊本女学校校長福田令寿に手紙を出して試験を受けさせてもらい、同校の四年に編入された。四年を終了し

たところで自主退学し、小学校教師になろうとしたが就職できず、鐘淵紡績の女工として四ヵ月程働いた。この四ヵ月の生活は、後の彼女にとつて、たいへん貴重な体験となった。

翌三年、彼女は下益城郡内で三年半の代用教員生活を開始し、砥用、佐俣、弘川などの小学校に勤務する。弘川小では父が校長であったが、その頃、後の夫である橋本憲三との文通がはじまり、彼女は憲三に会う機会をつくりたい一念で、強引に退職して熊本に出た。

六年秋のことである。九州日日新聞社に入社して新聞記者になろうとしたが失敗し、職もなく飢餓に迫られしかも彼女に熱烈な結婚申込みをする青年があつて橋本憲三との関係はこじれ、彼女は追いつめられた境地から、同七年捨身の四国八十八か所巡りに出立した。九州日日新聞社の社会部長宮崎大太郎に遍路行脚記を送ることを約束して一〇円を貰い、これを四国へ渡る舟賃に充てる予定の外は全く他人の情にすがらる遍路行のつもりであった。その道々九州日日に送った文章が「娘巡礼記」



で、六月六日から二月一六日まで一〇五回にわたって連載された。この連載は、若い女の一人旅というだけでなく、遍路らの実態と各地の物珍らしい情景描写が、情報として読者の好奇心を満足させ、当初関係者の誰もが予想しなかった大ヒットとなり、高群逸枝の文名を一度に高めた。

当時九州日日新聞は国権党の機関誌であったが、旧肥後藩領の豊後四郡とその周辺の大分県一帯にも熱心な読者層を持ち、大正七年頃には久留米・鹿児島・宮崎に支社を置いており、読者も九州一円に拡がっていたから、この「娘巡礼記」の反響は大きかった。但し、正確には巡礼は西国三十三か所の

観音霊場を巡るものであり、四国八十八か所霊場を巡るのは遍路なのである。

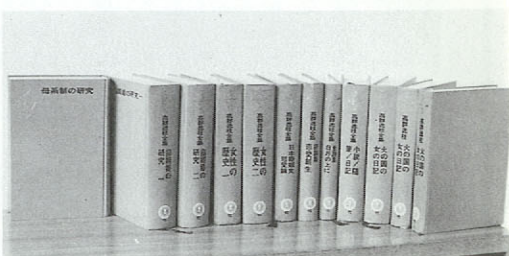
新聞の連載によって逸枝の行動を知った弘川の実家からは帰ってこいとの手紙があり、彼女は熊本に帰着した翌々日弘川に帰り、なつかしい父母弟妹と二年有余振りに再会した。彼女はこの遍路行によって「世の中の一切に対する平等の愛」を考え、翌八年一月、九州新聞に「愛の黎明」と題する書簡形式の随筆を投稿し、これは五回にわたって掲載された。橋本憲三もこれを読んで彼女の精神を理解し、大正八年二人の婚約がまとまった。

九年逸枝は詩集「放浪者の詩」の原稿をもって上京し、新潮社からの出版

が決まり、上京後に書いた自伝的長編詩「日月の上にも雑誌」「新小説」の一〇年四月号に一挙に掲載され世の注目を浴びた。彼女がこの二冊の詩集で華々しくデビューしたこの年、橋本憲三は突然上京して彼女を熊本に連れ帰り、八代市郊外の弥次村で八ヵ月を過ごした。この時の作品が「私の生活と芸術」として、翌年出版される。同一年逸枝は橋本憲三と結婚して橋本姓となる。しかし同一四年逸枝は主婦としての生活の矛盾に苦しんで家出する。

憲三は夫としての自分の在り方を悔悟し、家をたたくまで後を追った。大正末年から昭和初年にかけて、逸枝は無政府主義の立場で評論活動を行い、昭和五年平塚雷鳥と無産婦人芸術連盟を結成し、機関誌「婦人戦線」を発刊するが翌年廃刊する。このような活動の時期、女性解放の旗手としての彼女は、解放を主張する際の歴史的根拠の弱さを痛感させられた。家族制度を日本古来の美風とする考え方が正しければ、女には永遠に解放の希望はないことになる。そこを解明しなければ問題は先へ進まない。そこで彼女は日本の婚姻制度の検討に唯一人で挑戦を開始したのである。

昭和六年、夫憲三は世田谷に彼女のための研究所を新築し、彼女は以来なくなるまでの三四年間、夫憲三の献身によって門外不出で女性史研究に没頭する。最初の成果は昭和二年の『大日



本女性人名辞典』であるが、これは副産物で女性史研究の第一巻『母系制の研究』は昭和十三年はじめて世に送り出され、学界に衝撃を与えた。また戦後同二八年の『招婿婚の研究』も、これまでになく独特の研究として、おどろく程の反響があつた。その後連史としての『女性の歴史』を完成したのは三三年、『日本婚姻史』は三八年で、翌三九年六月、彼女は夫憲三にみとられて世を去る。彼女の死後憲三は水俣市に隠棲し、逸枝の『火の国の女の日記』を書きついで出版し、独力で『高群逸枝雑誌』を発行し続けてその顕彰に努め、同五一年七八歳でなくなった。日本女性史研究の大著は実に四五五年の夫妻一体化の成果であつたのである。

参考文献

- 九州日日新聞「娘巡礼記」
- 鹿野政直／堀場清子共著「高群逸枝」
- 橋本憲三「高群逸枝雑誌」